地域とつながる住宅の庭

ランドスケープアーキテクト／アトリエ土里夢代表
越川　秀治

東日本大震災後、ますます地域とのつながりや強いコミュニティーが求められるようになった。住宅の庭もその役割の一部を担う。例えば、一戸建て住宅の庭は家族や近隣とのコミュニケーション環境をつくり、地域との接点となる社会的空間をなす。さらに家庭用燃料電池と合わせたソーラーシステムや雨水利用、防災井戸、コンポストなど個々の住宅の庭から広がるさまざまな取り組みが地域へ効用をもたらすと考えられる。ここでは住宅の庭の〝新たな役割〟を考えてみたい。

家に庭があって「家庭」という

庭は家族との関係を深める場であり、自然を身近に感じ四季の移ろいを実感させてくれる役割を持つ。本来、日本語には「家庭」というすばらしい言葉がある。昔から家と庭は切り離せない関係なのだ。ところが、近年、庭を排除してコンクリート一色に塗り替えてしまう住宅が目立つようになった。住み手側の意識の低さもあるが、やはり作り手が庭の重要性、土のある暮らしの意義を十分に伝えきれない結果である。これは問題だ。

一方で、庭は社会的環境を生み出す重要な役割を持つ。町並みを形成する景観構成要素の重要な一部をなしている。門からファサード、玄関へのアプローチに沿って連なる外構植栽、道沿いにセットバックした植栽エリアと生け垣、シンボルツリーや緑陰樹など。これらは季節ごとに表情をつくり、道行く人や地域全体に潤いを与えると同時に、その地域にしかない生態系の維持に少なからず貢献できるのだ。

家と庭があって四季の移ろいがわかる。薪ストーブ（右端）は計画停電時に役立った

マンションの防災井戸のある里山ガーデン。災害に強いコミュニティーづくりを担う

隣近所を「庭でつなげる」

都会では個々の住宅に植えられる緑の量には限界があるが、ご近所同士が意識して緑でつながっていけば、まとまりのある緑地が地域に創出される。既存の公園や社寺林、学校緑地などの緑地スポットと併せれば、ちょっとした緑の回廊が形成できる。住宅の庭を介して人と人がつながり、人と自然がつながる、我が地域を振り返る良い機会になるはずだ。

例えば、エントランスの一画にたった一本でよい、見栄えの良い樹木を植えてみよう。それは家の顔となるシンボルツリー、落葉樹が好ましい。春は可憐（かれん）な花を咲かせ、夏には葉が生い茂り、秋には実を付け、美しく紅葉する。冬は野趣にとんだ冬枯れの姿をみせる。工夫次第で誰もが四季を通して、自然を身近に感じられる緑豊かな暮らしができる。住宅の庭にはまだまだ可能性がいっぱいある。もっと気軽に、手頃に、身近に、緑を楽しむ方法があっていい。

「里山ガーデン」を取り込む

筆者が以前から提唱している「里山ガーデン」について紹介したい。里山ガーデンの定義は里山の持つ要素（風景・植生・生態系・機能・循環システムなど）を可能な限り取り込んだ庭環境であること。また、季節ごとに適切な手入れのもとに、多様な生きものを呼び込む仕組みを持ち、常に四季（旬）を感じられる、暮らしの中に溶け込んだ庭空間を言う。

たとえそれが都会の小さな庭やマンションのバルコニーであっても「里山ガーデン」と呼べるのである。里山ガーデンは庭としての存在だけではなく、暮らしの中の要素であり、機能である。里山ガーデンをつくると同時にこなす、そこに関わる、それを遊ぶことも重要だと考えられる。

景観にとけ込むゴミ置き場。ゴミの収集場所は町並みを形成する重要な要素となる

里山ガーデンを通して季節を楽しむアイデアをつかもう。自然の恵みを感じる〝気づき〟を持とう。「わずかな工夫で、お金をかけずに、私にもできそうだ」といった、ちょっとしたヤル気で誰もが始められる、そういう庭の楽しみ方もあっていい。極端な話、かしこまる必要がなければ一般住宅の庭も20万円からできる。あとは住む人のやる気とアイデア次第でいかようにもなる。

住宅地区をつなぐ「防災井戸」

2012年3月、千葉県稲毛市にあるマンションの敷地内に〝防災井戸〟のある里山ガーデンをつくった。災害に強いマンションは住民同士の絆も強くなる。井戸から広がる住民間のコミュニケーション、近隣コミュニティーにも安心感を与える。まさに井戸という機能を備えたコミュニティーガーデンの発想であり、マンションと住宅地区をつなぐ新たな防災対策の事例として紹介したい。

庭でパーティー。自作バーベキュー炉（奥）に人が集い開放感をつくる。災害時にも役立つ

筆者は井戸を中心とした庭に、住人が日々いかに関わっていくか、ひいてはそれが普段からの情報交流の場となり、そこがいざという時に近隣のコミュニティーを含めて安全拠点として役立つ緑地空間となるべきだ、と提案した。施工のポイントは①井戸水を利用した小川と小さな池を設置し、普段は子どもに開放する②井戸周辺は安全性と利用性に配慮し、一部既存植栽を残し、管理しやすい野草群の種をまく③株立ちの雑木類を核に小さな里山を再現し、丸太のテーブル、スツール、枕木の立ち水栓を修景の一つに加える。

設計上、心配した点は井戸といっても、実際には何の変哲もない電動ポンプが置かれているだけで見た目に楽しみがないこと。さらに地下70㍍の掘削工事の途中で障害物があった場合、計画の変更あるいは中止になる可能性があること。その水が水質検査で飲めない危険性もある。予想がつかない分リスクが高かったが、結果は良好、水圧も高く水も軟水でおいしかった。

防災井戸のある里山ガーデンの開設後1年が経過したが、住人間のつながり、近隣コミュニティーとの関係、庭の活用用途の変化、マンション理事会への反響などに、さまざまな効果が表れているという。こんな今だからこそ、地域につながる住宅の庭のあり方、災害に強いコミュニティーづくりは今後、大いに注目すべきである。

里山ガーデンづくり 12の決まりごと

（2008年　越川 秀治）

1. 日本の豊かな四季が感じられる、雑木類、低木類を使う
2. その土地の気候、環境条件に適した植物の選択、手入れのしやすい植栽にする
3. 手間のかからない下草や宿根草、色を添える季節の園芸種と組み合わせてもよい
4. レンガ、自然石、まくら木など舗装材に川砂、路盤材、けい砂は極力使わず、残土を利用する
5. レンガテラス、ウッドデッキ、ベンチ、パーゴラ、ガゼボ、芝生など緑陰休息スペースを設ける
6. アーチペーブメント、菜園、切り株、隠れ家、バーベキュー炉など遊びを生みだす場をつくる
7. シンボルツリー、池、流れ、花壇など、アクセントを用いて庭の表現を豊かにする
8. 鳥や昆虫を呼ぶ庭、果樹や実のなる木を植えて、食べる景観をつくる
9. 化石燃料・化学薬品は極力使わず、天然材、国産品、在来種、リサイクル材を多用する
10. 極力土の面を残す。雑草取りは草刈りやマルチングに、エコ土壌舗装材で雑草を防止する
11. ゴミを出さない。落葉小枝は腐葉土、雑草は土に埋め戻し、太枝は保管し花壇の材料にする
12. 庭でのコンポストづくり。栄養満点の土から元気な植物を育てる

住宅特集

「親子同居のことなら、ヘーベルハウス」

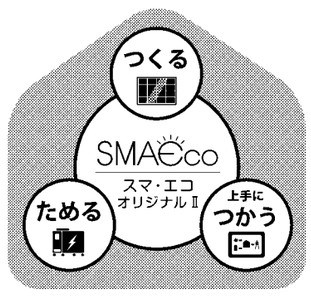
未婚化晩婚化が進み、いま親と単身の子が暮らす世帯が増えています。一方で、先に結婚して家を出た子世帯が、子育て期に入り二世帯同居を望むケースも多く見られるようになりました。こうした時代のニーズに応える**新しい同居スタイルが「2.5世帯住宅」**です。その一番のメリットは、**家事の面でも経済的な面でも、協力し合える**こと。全員が働いていても、何かあったときは誰かしらがバックアップでき、資金を出し合うことでローン返済能力も高まります。二世帯住宅の豊富なノウハウを持つヘーベルハウスは、働く単身の子の充実マイルームを含め、それぞれの世帯の独立性を基本に自然な交流や協力ができる、「2.5世帯住宅」ならではの理想のプランをご提案します。

旭化成ホームズ株式会社
〒160−8345
東京都新宿区西新宿1-24-1　エステック情報ビル
TEL 03−3344−7115
http://www.asahi-kasei.co.jp/hebel/

エネルギーの自給自足をめざす、
次世代の家。

限られたエネルギーを効率よくつかい、環境に配慮しながら、快適に暮らす。
人や社会が求める暮らしが、もうはじまっています。
ダイワハウスのスマートハウスも、時代の要請に応えた家のひとつ。
太陽のチカラでエネルギーをつくる。蓄電池にエネルギーをためる。
そして「D-HEMS Ⅱ」で上手につかう。
しかも、省エネ性と耐久性に優れたxevoなら、
スマートハウスの機能を存分に活かすことができます。
「スマ・エコ オリジナル Ⅱ」。
すべては、今日の快適と、未来の笑顔のために。

**外張り断熱通気外壁など、省エネ性能を磨いてきた
ダイワハウスの、一歩進んだスマートハウス。**



スマ・エコ　検索

Daiwa House
大和ハウスグループ

未来を、つなごう We Build ECO

大和ハウス工業株式会社　www.daiwahouse.co.jp
大阪市北区梅田3丁目3番5号　〒530-8241　建設業許可番号・国土交通大臣許可(特-22)第5279号
東京都千代田区飯田橋3丁目13番1号　〒102-8112　宅地建物取引業者免許番号・国土交通大臣(14)第245号